

子宮頸がんワクチンの接種を再開します

子宮頸がんワクチンは平成 22 年 10 月から自治体による公費助成が開始され、平成 25 年 4 月より定期接種化されました。しかし、同年の 6 月にワクチン接種を受けた女兒の中に慢性疼痛を主体とする原因不明の症状の発症が報告され、因果関係がはっきりするまで積極的な接種勧奨が中止されました。即ち接種しても良いが、国としては積極的にはお勧めしません、という位置づけです。このワクチンの副反応という女兒の映像が報道され、あたかも大変危険なワクチンであるとの印象をもたれている方も多いと思われそうですが、果たしてそうでしょうか。当クリニックでは以下に挙げた理由により子宮頸がんワクチンの接種を再開することにいたしました。

■ 子宮頸がんワクチンは多くの国で接種されており、子宮頸がんの前がん病変の発生が約 50%減少していることが示されています。日本では年間 3000 人ものがんが命を落としており、このワクチンによる恩恵は非常に大きいと思われます。

■ ワクチンの副反応を疑われ、未だに症状が改善しない方は 186 人と報告されています。約 890 万回の接種が行われていますので、0.002%の発生率です。この方たちの多くががワクチンの副反応とはいきれないことはこれから説明します。

■ ワクチン接種後の慢性疼痛を引き起こすものとして複合性局所疼痛症候群（CRPS）というものがあります。これは先行する怪我や痛みにな釣り合いな激しい疼痛が持続し、患部が極端に冷たくなったり、熱くなったり、著しく腫れたりします。やがて骨や筋肉が萎縮し、関節が動かしくくなります。これは脳と神経の誤作動によって生じる無意味な痛みです。一度発症してしまうとなかなか治療困難なケースが多いことが知られています。子宮頸がんワクチン接種後でも引き起こされる可能性はあり、実際にワクチン接種後にこの病気を発症され、苦しんでいる方がいらっしゃると思いますが、特にこのワクチンが引き起こしやすいとは言えません。

■ 一部の医師がワクチンが免疫系に悪影響を及ぼし、神経やホルモンのバランスに変調をきたすと主張していますが、客観的な事実が乏しく、およそ科学的な主張には思えません。そして何より最も考えるべき転換性障害が否定されていません。（後述）

■ ワクチンの重篤な副作用として紹介される女兒の映像は、一般の方がご覧になれば恐怖でしょう。しかし多くの児の激しい動きは、説明されているようなけいれんや不随意運動（意図しない体の動き）ではありません。意図的な動きあるいは意図してはいないが、脳や神経の異常を疑わせる動きではありません。（本当に脳や神経に異常のある場合、あのような激しい動きをしながらご飯をこぼさずに食べたり、スマートフォンを操作することは困難でしょう。）

■思春期の女兒には従来から転換性障害が多くみられます。転換性障害とは心的なストレス、葛藤が身体症状として（転換して）現れる病気です。かつてはヒステリーと呼ばれていました。ワクチンの副反応とされる女兒の症状は、ワクチンを打ったことを除けば転換性障害とそっくりです。

■ワクチンの副反応と主張している一部医師は、患者さんに免疫を調整する治療を行っていますが、改善したとの報告はありません。

■日本より先行してワクチン接種を行っている外国からの報告では、ワクチン接種者の中に、前述のCRPSを含め、重篤な副反応が多発しているデータはありません。日本人だけに重たい副作用が多発するなどということはありません。

■以上を踏まえ、この問題に対する当クリニックの考え方は以下の通りです。子宮頸がんワクチンの副反応とされている慢性疼痛の一部はCRPSに由来する可能性はあります。しかしCRPSはこのワクチン特有のものではありませんし、このワクチンを接種することにより発症が増加するとは言えません。（ほかの怪我がきっかけでも発症します。）ワクチン接種あるいはその痛み、あるいはその後のCRPSが引き金となって転換性障害を発症している可能性があります。その場合、ワクチンはきっかけに過ぎず、原因はそのお子さんがもともと抱えている心的ストレスや葛藤です。そのケアをしなければ症状の改善は見込めません。百歩譲って未回復の副反応とされる方186人がすべてこのワクチンが原因だとしましょう。ワクチンを接種した方は約300万人なので、約5年分の女子人口に相当します。1年あたり約40人ということになります。ワクチンはこれまでのデータより子宮頸がんの死亡率を半減させることが期待されますので、少なくとも年間1000人以上の女性の命が救われます。そしてこの何倍もの女性たちを子宮頸がんから解放します。答えは自ずから出てくるはずで、そして子宮頸がんワクチンは時機を逸すると効果が期待できないのです。

■WHOは日本を名指して「若い女性たちは、本来予防可能であるHPV関連がんの危険にさらされたままになっている。不十分なエビデンスに基づく政策決定は、安全かつ効果的なワクチン使用の欠如につながり、真の被害者をもたらす可能性がある」と警告しています。即ち、子宮頸がんワクチンをめぐる問題の真の被害者は、ワクチンの接種機会を奪われた女性であるとの強い警告です。

■日本小児科学会、日本産婦人科学会をはじめ、多くの学術団体、そして多くのワクチン接種に携わる医師が接種勧奨の再開を望んでいます。

以上、当クリニックの考え方を良く理解して頂き、あわせて厚生労働省の「子宮頸がん予防ワクチンを受ける皆様へ」を良くお読みになり、接種に同意される場合には別紙同意書に署名して下さい。

医)紘生会 かわかみこどもクリニック